

1 計画の概要

(1) 計画策定の背景

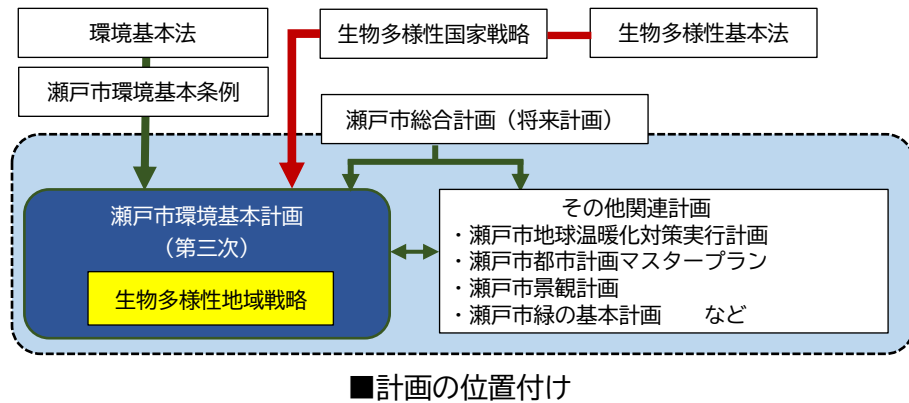
本市は、豊かな自然を活かして安全で快適な暮らしのある「環境創造都市」を次代につなぐことを目指しています。このため、「第三次瀬戸市環境基本計画」においても、「貴重な自然環境の保護・保全」「生物多様性の保全」「自然とのふれあいの推進」についての施策を展開しているところです。

(2) 計画策定の趣旨

令和 2 年度（2020 年度）に策定した環境基本計画については、本年度に中間評価を実施・改定するとともに、近年の社会動向に鑑み、「生物多様性地域戦略」を統合策定するものです。

(3) 計画の位置付け

本計画は「瀬戸市環境基本条例」に基づく計画で、市の最上位計画である「瀬戸市総合計画」に掲げられた将来像を、環境面から実現するための環境基本計画内の、特に「生物多様性に関する役割」を担います。



2 社会の動向

●生物多様性条約

・生物の多様性を包括的に保全するとともに、生物資源を持続可能な形で利用していくため、国際的な枠組みを制定すべきとの議論が活発化し、平成 4 年（1992 年）に開催された「リオ地球サミット」にて、「生物多様性条約」が採択されました。我が国はその翌年に条約を締結しています。

●生物多様性基本法

・我が国では、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する施策を総合的・計画的に推進することで、豊かな生物多様性を保全し、その恵みを将来にわたり享受できる自然と共生する社会を実現することを目的とし、平成 20 年（2008 年）に成立・施行されました。

●生物多様性国家戦略

・生物多様性の保全と持続可能な利用に関する国の基本的な計画です。我が国は、平成 7 年（1995 年）に最初の生物多様性国家戦略を策定し、これまで 5 回の見直しを行ってきました。

・現行の生物多様性国家戦略は令和 5 年（2023 年）に策定した第六次戦略「生物多様性国家戦略 2023－2030」となります。

●昆明・モントリオール生物多様性枠組－ネイチャーポジティブに向けた世界目標

・2050 年ビジョン、2030 年ミッション、2050 年グローバルゴール、2030 年グローバルターゲット、及びその他の関連要素から構成されています。

・2030 年グローバルターゲットには、日本が特に重視している 30by30 や自然を活用した解決策などの要素に加え、進捗を明確にするために 8 個の数値目標が盛り込まれました。

瀬戸市生物多様性地域戦略検討骨子（案）

3 現状と課題

森林	<ul style="list-style-type: none">森林は市の北部から東部にかけて広がっており、現在市域の約 56% を占めている。森林の大部分は二次林で、落葉広葉樹が多いものの、一部では遷移が進み、常緑樹が進出している。常緑樹は、定光寺などの社寺林に多い。かつては薪炭林として利用されてきたが、現在は森林の利用はない。 《代表》海上の森、猿投山、愛知高原国定公園、東京大学生態水文学研究所赤津研究林、馬ヶ城浄水場	河川	<ul style="list-style-type: none">市内には瀬戸川、矢田川（山口川）、水野川、蛇ヶ洞川という大きな 4 つの河川が流れしており、市内の支川数は 76、支川延長は 106.42km に及ぶ。市内の河川は庄内川水系に属し、三国山・猿投山山麓を源にもつ。川の水は工業用水・農業用水、そして生活用水として利用されてきたが、蛇ヶ洞川や矢田川上流は現在でも水道水源として利用されている。 《代表》瀬戸川
湿地	<ul style="list-style-type: none">本市の湿地は、「東海湧水湿地群」と呼称され、規模が小さく、貧栄養であることが特徴である。粘土層が豊富な本市では、土砂崩れなどではがれた地表面が湧水によって地表面が湿ることのできる湿地が多く見られる。分布は東海層群によって形成された丘陵地に多く、特徴的な湿地性植物や動物が生息する。	湖沼・ため池	<ul style="list-style-type: none">自然発生的な湖・沼・湿地は小規模なものしか存在しない。水田耕地での土地改良事業の実施、農地転用や休耕による灌漑面積の縮小などの利用から、ため池の需要が低下し、廃池になっている池や埋め立てや改変された池なども多く見られる。市内の水田は河川によって潤されており、山間には小さな灌漑用の溜池が点在する。
身近な自然環境 （里山・農地）	<ul style="list-style-type: none">豊かな自然環境を活かした自然観光資源は、身近な自然環境として親しまれている。特に東海自然歩道のルートにもなっている定光寺、岩屋堂、猿投山、海上の森は年間を通じて多くの人が訪れており、レクリエーションの場としてだけでなく環境活動や学びの場としても利用されている。 《代表》海上の森、愛知高原国定公園、ねむの森、	生物	<ul style="list-style-type: none">希少種には里山の代表種であるギフチョウ、湿地性植物であるシデコブシやマメナシ、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオなどが分布しており、当市の多様な自然環境が様々な生きものの生息・生育を支えている。一方で多くの外来種の侵入もある。アライグマ、ハクビシン、ヌートリアが代表種であるが、カミツキガメやセアカゴケグモのように人体に危険が及ぶ種の確認もされている。

課題

■ 特定地区の指定拡大と既存地区における保全活動の実施

- ・下半田川町蛇ヶ洞エリア
- ・新地区指定に向けた検討

■ 身近な生きものの生息、生育環境にも配慮した生物多様性保全の充実

- ・自然環境の適切な保全及び体制の維持
- ・外来種・野生動物への対策
- ・市民をはじめとした様々な主体の積極的な関わり

■ 身近な自然を活かした自然とのふれあいの充実

- ・ふれあいの場・機会の創出

4 基本戦略と施策体系

★目指す将来像：貴重な自然環境の保護・保全と身近な自然の保全・活用

戦略	1 生物多様性の保護・保全	2 協働による取組	3 環境教育・啓発及び情報発信の充実
施策の方向性	<ul style="list-style-type: none">・自然環境特定地区の保護・保全活動の継続、新規地区の指定・自然環境の適切な保全及び体制の維持・30by30 目標の達成に向けた支援・定期的な自然環境の現状調査の実施・外来種などの防除	<ul style="list-style-type: none">・様々な主体との協働による保全の取組・ネットワーク体制の構築・法や条例の適切な運用	<ul style="list-style-type: none">・せと環境塾などの実施・環境学習ツールの提供（自然環境分野）・生物多様性に関する情報の発信
主な指標案	<ul style="list-style-type: none">➢ 身近な生態系の自然環境調査の実施	<ul style="list-style-type: none">➢ 市民との連携・協働による保全の取組➢ パートナースhip型組織の参加	<ul style="list-style-type: none">➢ 自然とのふれあい講座やイベント実施回数及び参加人数➢ 「せと環境塾」などの満足度（認定講座、イベントなど含む）